

真鶴 自治会だより

皆、皆が住みよい町に

寄稿

町の誇り

中川一政美術館

真鶴町立中川一政美術館の学芸員として配属されました、蔵本敬大(くらもと たかひろ)です。皆さん、どうぞよろしくお願いたします。

私は、配属から約9ヶ月、真鶴町民と美術館を繋げていく仕事の一助を担いたいと考えています。美術館をサロンとして色々な美術に関する雑談をする場所、美術館の高い敷居、イメージを無くすことが私の仕事だと考えております。今回は、簡単ですが美術館の紹介をしたいと思います。

当美術館は、日本洋画壇をけん引した画家中川一政より真鶴町に多数の作品の寄贈を受け、1989(平成元)年3月に開館しました。今現在中川一政の画業の変遷を辿る上で欠くことのない初期作品から晩年作品まで(油彩画、水墨岩彩書、

陶芸)を所蔵しており、その総数は850点にのぼります。

中川一政は、1949(昭和24)年に真鶴半島の一角にアトリエを構え、自然と対峙、共鳴しながら数多くの作品を遺し、97歳で亡くなる直前まで精力的に創作活動を行い、生命力溢れるその作風と制作スタイルから「生命の画家」と呼ばれてい

たいと考えています。生涯現役を貫き画業に邁進した中川一政の作品や生き方は、高齢社会に突入した現代社会を生きる我々に勇気を与えてくれると信じています。ゆえに、真鶴町の誇りともいえる真鶴町立中川一政美術館が果たすべき社会的役割は大きく、訪れる度に新たな発見や感動と出会える美術館を目指し、小さな町から世界へ向けて発信する活動に努めていきたいです。



中川一政「真鶴の燈台」
油彩・キャンパス 1968



美術館外観写真

防災講演会&ワークショップ

「さすけなぐる」



ってなあに?

令和6年6月29日 主催：真鶴町自治会連合会

一般社団法人ふくしま連携復興センター代表理事・福島大学人間発達文化学類特任教授の天野和彦氏を講師にお迎えし、防災講演会&ワークショップを実施しました。昨年10月28日にも天野先生をお迎えし、「東日本大震災の教訓から考える地域防災」というテーマで東日本大震災時に避難所で先生が取り組んだ活動内容や教訓を聞かせて頂きました。今回は聞くだけの講義ではなく、災害時に避難所で発生するさまざまな問題に対し、避難所運営者は実際の現場でどう対応すれば良いかを学ぶため、「さすけなぐる」と呼ばれる防災教材を使った講習を受けました。



「さすけなぐる」は福島弁の心配ないという意味の「さすけねえ」と英語のsustainable(持続可能)を掛け合わせた造語と

(文責：広報部 高瀬哲夫)

「さすけなぐる」の5 U S K E Y

- U** 語りげなく被災者の声に耳を傾け、生活環境の改善を進めよう。(声には「大きな声」と「小さな声」があることを忘れず)
- S** しばやく 被災者の生活(暮らし)実態や課題をしっかり把握しよう。(時間経過によるニーズ変化があることを忘れず)
- U** むたがらずに 被災者同士、被災者と支援者等が交流できる場をつくらう。(主体は被災者であることを忘れず)
- S** ないものねだりはやめて 地域の専門機関や団体等のネットワークを活用し、課題解決を進めよう。
- K** 「できなない」ではなく、「どうすればできるか」の視点を)
- U** むる(ぐる)さこのような被災者の参画による自治的な組織をつくらう。(避難生活は、生活再建の第一歩であること忘れず)



編集後記

今回の防災講演会&ワークショップでは避難所にはさまざまな人が集まることを想定して、グループ分けを同じ自治会の人でグループ分けに班編成され、テーマに対して意見交換し発表しました。前回の天野講師による「東日本大震災の教訓から考える地域防災」は自治会だより第113号に記載しているのでご参照願います。

岩地区では7月14日(日)親子神社例大祭、8月3日(日)岩海岸夏まつりが開催され大勢の参加者で開催できました。灯籠ながしでは500基の灯籠で海上を照らしました。真鶴地区では7月26日(日)貴船まつりが開催された。今回「小早船」の進水式(水浮)を待っている時、役員の方が見物客にまつりの説明をしてくれて見物客を和ませてくれました。最後に「まつりは見学するより参加した方が面白いよ」という言葉が印象に残りました。今回の各まつりに準備、参加された皆さん、お疲れ様でした。

中川一政美術館学芸員の蔵本さんからは現状の美術館運営、中川一政の作品等の説明をつけ、いかに町民の皆さんに好まれる様にしたいかの思いが伝わってきました。(広報部 高橋 靖彦)

自治会連合会 ホームページ

自治会の活動内容を紹介します。是非ご覧ください。



参加者の声



西自治会 村田 知章
目からウロコのようなお話が満載でした。避難所を運営するのに、物資の備えだけではなく、考え方の準備の重要性も教わりました。いざという時の状況判断が出来るのが、関連死を防ぐ決め手だと思いました。

みさき自治会 那須 雅代
災害が多い日本の真鶴半島に移り住んで8年、これからは自治会はもとより、道で出会う町の人たちと挨拶・会話を交わすことを心掛けようと自分に言い聞かせました。天野先生の再度の講演で避難所運営のグループ討論を通して、人と人のつながりがいかに大切かを確認しました。できれば、自治会への加入者が増えることを望みます。

城北自治会 重栖 和子
避難所で起きる日々の問題は、早い回答を求められることが多かった...とか。
今回は5~6人のグループで一つの問題を話し合い、一つの答えに纏めるワークショップを行った。
ディスカッションすること
で、たくさん意見をまとめられた。



2024年 小早船完成時の集合写真。新たな参加者が増えて賑やかに

日々刻々と変化する自然の美しさ、いつでも声を掛け合えるご近所さんとのつながり、小規模ながらも開催された「貴船まつり」で疫病退散を祈る鹿島踊りの有り難さ。小さいまちだからこそ顔の見える安心感を得られた時間でした。

コロナも収束しつつあった昨年6月、我が家の大家である草柳商店さんから「貴船まつりが担い手不足で大変だから手伝ってあげて」と声を掛けてもらいました。長くまつりの中心だった方々がコロナ禍中にリタイアされたりして、いろいろなものが伝承されなくなっているとのことでした。

真鶴町が過疎に悩んでいるのは知っていましたが、まちの誇りである「貴船まつり」でさえ同じ状況なのかと、とても驚きました。漁業や石材業など、まつりの担い手である一次産業従事者が減少しているから当然のことなのに、そこに気づけなかった自分を恥じました。でも、僕ひとりに何ができるでしょうか。

一つだけ希望がありました。それは近年、真鶴の自然や文化に関心を持ち、まちに参加したがつている移住者が増えていること。そして多くの地元の方々は、そうした ” 真鶴

み なさま初めまして、松平直之と申します。職業は映像ディレクターです。2016年に真鶴町の公式プロモーション映像「真鶴半島イトナミ美術館」を制作したことがきっかけで、真鶴の人々の温かさに惹かれ、2018年に都内から家族で移住してきました。仕事場が都内にあるので、週末だけの真鶴暮らしでしたが、2020年からの新型コロナウイルス感染症の拡大で、平日も在宅勤務となり、改めて真鶴の魅力を知ることになり



2024年7月 岩の「兒子まつり」の準備に有志数名で参加

を愛する” 移住者が増えていることをご存知ないこと。そこで、まつりを契機に未だ出会っていない地元住民と移住者をつなげたら、何かが変わるかもしれない。そう思ったのです。

そこで、移住者が情報交換に使っているSNSコミュニティに、まつりへの参加方法や準備の予定表と共に、小早船の花飾りをつくる様子や神輿を組み立てている様子、



2024年6月 貴船まつり関係者をお招きして説明会を開催

寄稿

真鶴のまつりとまちづくり

貴船まつり推進本部理事 松平直之



2023年 初めて貴船まつりの準備に参加された若いお母さんたち

そこに集う皆さんの様子を写真に撮って日々発信し、まつりへの参加を募りました。その結果、昨年のまつりの準備には、子育て世代のお母さん、僕のようなフリーランス、会社員の方々など、40名以上の方々が参加してください、地元へと馴染んでいきました。これまで「見るだけ」だったまつりが、「参加する」まつりに変わった瞬間、僕たち移住者にも変化が起きました。「私たちのまち」のまつりだと心から思えたその表情は、もう移住者のものではなく地元の方々と同じ顔つきになっていたのです。まつりは人がつくり出すものですが、まつりもまた、僕たちを真鶴人へと育ててくれていたのです。人が減ったまつりに、新たなつながりを生み出すことで状況は改善できることを昨年のまつりから学びました。そして今年は、参加を更に増やすために3つの試みをしました。ひとつは、まつりを司る貴船神社の禰宜（ねぎ）と各保存会の会長をお招きした「貴船まつり説明会」の実施。80名を超える方々が集まり、まつりについての理解を深めました。

もうひとつは、真鶴地区と岩地区の地域を超えたお手伝いの輪を広げるために、今年から有志数人で「兒子まつり」の花だし飾り付けの準備に参加し始めました。そして最後は、まつりの写真の共有です。誰もが写真をSNSなどでアップして楽しむ時代。僕がみなさんのまつりでの晴れ姿を撮影して、データを自由に使っていただけるようにしました。SNSを通してまつり全体の発信力が高まるのではと考え、実践しています。

来年もより多くの方が参加し、更に良いまつりになりますように。

お読みいただきありがとうございました。



2024年 貴船まつりの写真を撮影し、参加者と共有

そこに集う皆さんの様子を写真に撮って日々発信し、まつりへの参加を募りました。その結果、昨年のまつりの準備には、子育て世代のお母さん、僕のようなフリーランス、会社員の方々など、40名以上の方々が参加してください、地元へと馴染んでいきました。これまで「見るだけ」だったまつりが、「参加する」まつりに変わった瞬間、僕たち移住者にも変化が起きました。「私たちのまち」のまつりだと心から思えたその表情は、もう移住者のものではなく地元の方々と同じ顔つきになっていたのです。まつりは人がつくり出すものですが、まつりもまた、僕たちを真鶴人へと育ててくれていたのです。人が減ったまつりに、新たなつながりを生み出すことで状況は改善できることを昨年のまつりから学びました。そして今年は、参加を更に増やすために3つの試みをしました。ひとつは、まつりを司る貴船神社の禰宜（ねぎ）と各保存会の会長をお招きした「貴船まつり説明会」の実施。80名を超える方々が集まり、まつりについての理解を深めました。



2024年 鹿島踊りの踊り手に若い移住者が参加

